

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第9回 火の海をくぐり抜けて

佐藤 玲さん 大正14年生まれ

私は、東京都の日本橋で5人きょうだいの末っ子として生まれました。私が女学校を卒業したのは太平洋戦争のさなかでしたが、卒業後2年ほどは日常生活に不自由はなく、貸家の管理をしていた父の仕事を手伝いながら長唄や華道、茶道といったお稽古を続けていました。

しかし、戦況は悪化の一途をたどり、昭和19年ごろから生活が一変。私は浜松町の軍需工場で会計係として働くことになりました。昭和20年になると毎晩のように空襲があり、ビルの陰に隠れながら帰宅することが多くなりました。

命からがら生き延びた東京大空襲

昭和20年3月、私は仕事を終えて自宅にいました。午後6時ごろから空襲に備えて屋外に明かりが漏れないようにする灯火管制のサイレンが聞こえたため、自宅前のビルに家族と一緒に避難しました。焼夷弾が「バラバラバラッ」と大雨が降るように落ちてきて、たくさんの家が燃えました。ビルの中にも火の手が迫ってきたため家族全員が一緒に死んでしまわないように2、3人に分かれて逃げました。

丸の内方面に向かった私たちは、小さなビルの地下に逃げ込みました。しかし、そこでも辺りは燃えていて、煙がひどく、すぐにいられなくなりました。町のあちこちに防火用水桶があったため、私たちはバケツ3杯ほどの水をかぶって外に出ました。その時、赤ちゃんをおんぶした女性に「背中の赤ちゃんにも水をかけてほしい」と頼まれました。



空襲後の日本橋付近の様子(東京大空襲・戦争資料センター提供)

た。赤ちゃんはすでに亡くなっているようでしたが、私はそれを伝えることができず、黙って水をかけました。

辺り一面に火が燃え広がっていたため、水をかぶってもすぐに乾いてしまいます。逃げる人々の荷物に火が付いて、それが火の玉になって転がってきます。私たちはそれをよけて、水をかぶりながら逃げ続けました。市営電車のレールは熱で真っ赤に、道路のアスファルトは溶けて柔らかくなっていて、私の靴には穴が空いてしまいました。その光景はとにかく恐ろしく、私が知る穏やかな町の姿はなくなっていました。

辺りが明るくなってから自宅のあった場所に戻りました。家は影も形もなく燃えてしまっていました。しばらくして、別々に逃げていた家族と再会することができました。

見渡す限りの焼け野原に、残ったのはビルの骨組みだけ。着の身着のままで火の海をくぐり抜けて帰ってきた後に見たあの光景は、決して忘れることはできません。家も、物も、たくさんの思い出が詰まった写真も1枚も残らず燃えてしまい、幸せに暮らしていた日本橋での日々は私の脳裏に刻まれたものだけになってしまいました。その喪失感は年を重ねても消えることはなく、今なお胸に残り続けています。平穏な日常や大切な多くの命を奪う戦争は、絶対にあってはなりません。それはいつの世も、どこの国であっても同じです。あのようにつらく悲しい思いをした者として、強く思うのです。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年4月15日号 No.1529



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は4月4日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

4月ももう中旬。入学・就職などによる環境の変化でストレスが溜まりやすいこの時期は、気分をリフレッシュすることが大切です。運動や買い物を楽しむという人もいますが、私のおすすめは、たくさん笑うこと。「笑い」には、心と体をリラックスさせるほか、免疫力を高めるなどの効果もあるそうです。私は、お笑い番組を観たり友人と話したりしていると自然と笑いがこぼれます。皆さんも、たくさん笑ってリフレッシュしましょう。

リサイクル適性(㊟)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。